もう一つの心の世界

―『おくのほそ道』と寿貞・冬室宗幻―

松原秀江

要旨

伊賀上野愛染院の過去帳に、松尾半左衛門の甥として記される「冬室宗幻」が、芭蕉（宗房）と寿貞との密かな幻の子であり、その延宝八年十月二十二日の死が、芭蕉深川隠栖の直接の原因になったと思われること、及び『おくのほそ道』とのかかわりについて述べた。

キーワード：松尾芭蕉、寿貞、冬室宗幻、深川隠栖、おくのほそ道

一

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を住みかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず。海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えむと、そぞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず。股引の破れをつづり、笠の緒つけかへて、三里に灸すゆるより、松嶋の月まづ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替る代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に掛けおく。

よく知られた『おくのほそ道』の冒頭部分である。延宝八年冬、繁華な日本橋小田原町から、突如深川村に隠栖した芭蕉は、更にまた元禄二年三月、その草庵も人に譲り、『おくのほそ道』の旅に出る。伊勢大神宮の遷宮式参拝の為、九月大垣を出発するまで、およそ五か月、二四〇〇キロにも及ぶ旅だった。

もっとも、この深川芭蕉庵からの旅は、これが最初ではない。天和四（貞享元）年八月、

野ざらしを心に風のしむ身哉

と発句を作り、『野ざらし紀行』の旅に出、大和・吉野・山城を巡って、美濃大垣の木因を訪ね、貞享四年八月には、曽良・宗波を伴い、常陸国鹿島の月見に出かけている。そして同年十月、

旅人と我名よばれん初しぐれ

の句を作って、『笈の小文』の旅に出立、翌年吉野・須磨明石を巡覧し、八月十五日信州更科の姨捨山で名月を眺め、江戸深川に帰っている（九月に元禄と改元）。にもかかわらず、その年が明けても「猶旅の心ちやまず」（元禄二年上・中旬猿雖―推定―宛書簡）、「風雅の魔神」（栖去

の弁）にでも魅入られたかのように、「そぞろ神のもの」について「心を狂はせ」、「取もの」も「手につかず」、『おくのほそ道』の旅に出るのである。

旅は風雅の花、風雅は過客の魂。西行・宗祇の見残しは、皆誹諧の情也。　（風狂人が旅の賦并小序）

などといった言葉（傍点筆者、以下同じ）を見、「旅人と我名よばれん」と芭蕉自らが望んだように、芭蕉を、杜甫・李白は勿論、西行・宗祇・業平などに列なる、「旅の詩人」と考える時、たとえば『笈の小文』に、

蹟は破れて西行にひとしく、天龍の渡しを思ひ、馬を借る時は、いきまきし聖のこと心に浮ぶ。山野海浜の美景に造化の功を見、或は無依の道者の跡をしたひ、風情の人の実をうかがふ。

などとあるように、「悟達の境地に至った聖者の遺跡」を尋ね、和歌・連歌などに詠まれる名所・旧蹟、即ち歌枕を求めて、[1]「造化にしたがひ、造化にかへ」ろうとする「乞食巡礼」（おくのほそ道）のような旅は、まさに芭蕉を芭蕉にしたと、云ってよいだろう。

従って、「幻住庵の記」で、「奥州行脚への旅立を語る枕に、深川隠栖の件を据え」、[2]

点者をすべきよりは乞食をせよ　（石舎利集）

などと云った言葉のある芭蕉の

・深川隠栖は、奥州行脚と同質の行動であった。少くとも、元禄三年（幻住庵入庵当時、筆者注）に至って回顧してみると、芭蕉にはそのように自覚されたのである。

・奥羽行脚に至る「人生即行脚」「俳諧即行脚」との自覚は、既に延宝八年冬の深川隠栖当時に誕生したものであり、従って、芭蕉独自の芸術を語るとすれば、この時点から開始すべきである。

と富山奏氏が云われ、

・旅立と入庵とは全く異った行動――むしろ逆の行動とも言うべきものであるが、芭蕉の方寸においては、根本的に同質の行動として、意識されていたのではなかろうか。

と云われた通りだと思われる。[2]

二

従って、深川隠栖は芭蕉にとって、それまで考えられてきた以上に、重大な意味をおびてくる。富山氏はその理由を、当時横行した「営利的な点取俳諧」に求められた。その根拠とされる書簡のほとんどが、元禄五～六年のもので、早くても貞享二年であるにせよ、それは欠かせない理由の一つだったろう。だがここでは更に、『芭蕉年譜大成』[3]の延宝八年の項の深川隠栖の記述の直前に、「十月二十二日」と記して、次のようにあることに注目してみよう。

伊賀上野愛染院の過去帳に「冬宝宗幻延宝八年十月二十二日松尾半左衛門甥」とある。この霊は芭蕉にとっても甥にあたるはず。桃印の弟である可能性が高い。

と。だが果して、ここに記される「冬室宗玄」は、芭蕉の甥で、桃印の弟だったのだろうか。芭蕉には「不幸な姉」がいたらしく、[4]その姉の子が桃印で、桃印は五十六歳で「父に別れ」、延宝四年帰郷の際、芭蕉が江戸につれて帰り、三十三歳の若さで病没している（元禄六年四月二十九日荊口宛書簡）。病死（労咳）を伝える哀切極まりない文面（同年三月中下旬頃許六宛書簡）から、若い頃の芭蕉と寿貞の子かと云われたりもしたが、「冬室宗幻」は、果してその桃印の弟だったのだろうか。戒名そのままに、「宗幻」こそ、宗房（芭蕉）の幻の子だったのではなかろうか。

そして憶測をたくましくすれば、その母は、伊賀上野の念仏寺日過去帳の二日死亡の戒名の中に、

松誉寿貞中尾源左衛門殿

と記される寿貞で、しかも、「貞徳翁十三回忌追善俳諧」（寛文五年蟬吟主催）に、蟬吟と宗房が、

憂さ積る雪の肌を忘れかね　蟬吟
氷る涙の冷たさよ扨　宗房

と詠み合ったことのある女性（勿論出家以前の）だったのではなかろうか。寿貞は元禄七年六月、芭蕉庵で亡くなるが、施主・中尾源左衛門

は、藤堂新七郎家の家臣と考えられている。[5] そして、藤堂新七郎良忠（蟬吟）は、この俳諧興行の翌年二十五歳で亡くなっている。殉死も考えて果せなかった程の若い宗房（二十三歳）[6] の純心無垢な嘆きが、同じ一途な嘆きの中にいた若くて美しい女の魂に共鳴して、「思ひのほか」（閉関の説）のことが、ふと起きてしまうこともあり得ないことではない。芭蕉には、女三の宮や、朧月夜の内侍の君の情事を詠み込んだかと思われる、

猫の恋やむとき閨（ネヤ）の朧月

といった「幽玄にして余縁ふかし」（芭蕉翁発句集蒙引）などと評される句がある。近世前期、実際にはないにもかかわらず、「わりなきは情の道」（恋は理性分別を超え、人間にはどうしようもないもの）といった言葉が、『源氏物語』柏木の巻にはある（心友記・好色五人女など）と信じられていた。のみならず、『俳諧類船集』（延宝四年刊）の「猫」の項には、「女三の宮」とあるだけでなく、次の歌、

うら山ししのびもやらでのら猫の妻こひさけぶ春の夕暮

も記されていて、『北条五代記』（寛永十八年刊）の、

うらやまし声も惜しまずのら猫の心のままにつま恋ふるかな

の歌も、定家作と考えられ、制約の多い社会で、「心のまま」の猫の恋を、「うらやまし」とする類型的な発想があった。[7] 芭蕉の句も、これらの類型を踏まえたものではあったろう。だが、芭蕉庵の反故（読者を予定していない）の中から、芭蕉の没後出てきた「閉関の説」の冒頭には、

色は君子のにくむところにして、仏も五戒の初めに置けりといへども、さすがに捨てがたき情のあやにくに、あはれなるかたがたも多かるべし。

などと、仏教の五戒では三番目にあげる邪婬戒を、やゝ高めの調子でその最初に置き、更にしば〳〵、

つらつら年月の移り来し拙き身の科を思ふに、（中略）一たびは仏離祖室の扉（とぼそ）に入らむとせしも、（幻住庵の記）

しばらく学んで愚をさとらんことを思へども、（笈の小文）

などと記して、仏道に深くかかわっていくのも、「のら猫の恋」としかいいようのない寿貞との一瞬のあやまちに、少くともその原因の一

端があったのではなかろうか。伊賀上野でささやかれる「語り伝え」[8]も、無視できないように思われる。そしてその子が、公にすることなど許されるはずもない密かな幻の子であるなら、預けなければならなかった兄半左衛門への申し訳のなさや感謝の念から、そしてまた、同じ暗い運命を背負った「はゝ様」[4]の子である異腹の姉や、その不幸な姉を母にして、幼くして既に父親まで亡くしていた桃印への哀憐の念から、芭蕉はまだ立机以前で、小石川の水道工事に携わらねばならないような、経済状態だったにもかかわらず、捨てるに忍びなかった我が子の代りに、即ち「義子同然に」、桃印を引き取って江戸へと下ったのではなかろうか。

三

それはたとえば、『おくのほそ道』に見られる歌枕は五十八、『曽良旅日記』に記した覚書には、百三十以上もの歌枕があり[1]、室の八島は、『おくのほそ道』の旅で、最初に訪れた歌枕だったにもかかわらず、その項の全文が、次のようになっていることからも、云えるのではなかろうか。

室の八島に詣す。同行曽良が曰く、「この神は木の花さくや姫の神と申して、富士一体なり。無戸室に入りて焼きたまふ誓ひのみなかに、火々出見の尊うまれたまひしより、室の八島と申す。また、煙を詠みならはしはべるも、このいはれなり」。はた、このしろといふ魚を禁ず、縁起の旨、世に伝ふこともはべりし。

と。

勿論、日光への道をやゝ遠廻りまでして尋ねた室の八島で、芭蕉が句を詠まなかった訳ではない。しかもその句、

糸遊に結つきたる煙哉

は、「曽良書留（俳諧書留とも）」に列記される他の四句の中で、芭蕉の捨てがたい執心の見られる句である[10]。のみならず、「かっては池全体が湧き水に満たされ」、水煙の立ち上っていた室の八島は、芭蕉が曽良と共に訪れた時、既に名のみで、「水なき故、烟もな」く（東路之記）、従ってこの句の「煙」は、「糸遊」という陽炎を表わす「やや古風」な表現とも相まって、「現実のものではなく古歌の世界のもので」、

「古歌を知らなくては理解しにくい」[10]程、王朝以来数々の和歌に詠まれてきた陸奥（みちのく）の歌枕、「けぶりたつ室の八島」を詠んだものだった。

だが、『おくのほそ道』に記されるのは、木の花さくや姫の伝説であり、このしろ縁起である。「糸」と「結」の縁語仕立てのこの句が、やや理屈めき[10]、芭蕉にとって不出来な句だったにせよ、推敲に推敲を重ねて、他の句同様、『おくのほそ道』に入れることもできたろう。歌枕を尋ねることが、この旅の欠かせない目的の一つだったことを思えば、や、不可解な不思議な現象である。

だが、尾形仂氏が、室の八島の縁起談に、「苦難の中から新しいものを生み出す象徴としての意味」を見られ[11]、立松和平氏が、「弟子一人を連れて、身一つになって、自分の評価が定まっているかどうかもわからない地図にもない世界に入って行くこと」と、「出口のない室に入って自分の身を焼く」ことは、「表現者として」「いっしょ」だと云われたことに[12]、注目するならどうだろう。一夜で懐妊したことを瓊々木尊に疑われた、木の花さくや姫がこもった「無戸室（うつむろ）」の「室」は、「深川」の「深」にも、「おくのほそ道」の「おく」にも通じるだろう。そしてまた、猶子とは「猶子（なほ）のごとし」、即ち子の代りをする者の謂だが、その猶子・桃印は、才能とは無関係に（句は一句も残っていない）、父の名を子が継ぐように、東下中の談林俳諧の宗匠・西山宗因を迎え、宗因風を顕著にする宗房が、俳号を「桃青」と改めたばかりのその「桃」の字をもらっている。だが、もし「冬室宗幻」が寿貞との間の子なら、芭蕉の場合木の花さくや姫伝説よりも事態は深刻で、宗匠としての立机も果し、三都十八人の宗匠の一人として、江戸俳壇の新進と認められていたにもせよ、その死は既に取り返す術もなく、おそらくそれは、芭蕉が誠の人であればある程、人生観をくつがえす程の大事件だったろう。死など遥かに超えた罰と思われたかもしれない。とすればたとえば、後に支考が、

むかし西行・宗祇など兼好も長明も、今日の蕉翁も、酒色の間に身を観じて、風雅の道心とは成給へり。此ゆへに文質も調へり。（口状）

などと記してもいるように[13]、もし再生を期すなら、それは青春の一時期、蟬吟その人と、身分も超えためくるめくような体験をした[6]俳諧の世界で、「身をえうなきものに思ひなし」（伊勢物語九）、既にない古（故）人の心に照して、色好みの業平がたどり着いた隈田川を起点に、より深く、より遠く、奥へ奥へと遡り、風雅の誠を極め、明らかにすることでしかなかったのではなかろうか。

四

室の八島に続く仏五左衛門の項を見てみよう。芭蕉が五左衛宅を宿にしたのは四月一日、しかも元禄二年三月は小の月で、三十日はないにもかかわらず、『おくのほそ道』ではその日のことにして、更に宿の主人・五左衛門を、「ただ無知無分別にして、正直偏固の者」だったにもかかわらず、「剛毅木訥の仁に近」いその「気稟の清質」故、仏五左衛門にし、

いかなる仏の濁世塵土に示現して、かかる桑門の乞食巡礼ごときの人を助けたまふにや

と記している。「前途三千里の思ひ胸にふさがり」「もし生きて帰らば」と、今回も何事かに追いたてられるように、西行など「昔の人の杖にすがり」（野ざらし紀行）出発した芭蕉にとって、御仏の加護だけが、確かな頼みの綱だったのだろうか。

そしてその願いも叶ったかのように、四月一日、季節も改った初夏の最初の日、「二荒山（ふたらせん）」を改めて「日光」とした、その日光に到着した芭蕉は、前夜から降り続いた雨も止み（曽良旅日記）、東照宮も含むあたり一面の輝くばかりの光の中で、

あなたふと木の下暗も日の光

と詠んだ句を、『おくのほそ道』執筆時には、雨の記憶も払拭し、更に詳明に、

あな（ら）たふと青葉若葉の日の光

と改めただけではない。[14] 曽良の剃髪・改名は、前年（元禄元年）歳末かと云われるが、それも、家康によってなされた天下泰平の今の世の、あらゆるものに恵みを垂れて、健やかに育ててやまない夏の季節（四月は家康の亡くなった月。毎年例祭が行われた）の最初の日のことにして、

剃り捨てて黒髪山に衣更

と詠み、「松島・象潟のながめ」を「共にせん」ことを「よろこび」願った、同行曽良の句にしたのである。[15] そしてまた、

「衣更」の二字、力ありてきこゆ。

と結ぶのも、修験道の霊地として栄えた男体山（黒髪山）に登れば、聞こえてくる「水の音」、ねじめ正一氏が、

最初はゴーッと音がしてるんですけど、やがてそのゴーッが身体と一体になってきて、何か自分の血液の流れのように感じてくる。と云われた[12]「水の音」と、無縁ではなかったろう。というのも、その水の音を全身に受け止め、更にその先裏見の滝へと進んだに違いない芭蕉は、「身をひそめ」て入った「岩窟」で見た、激しく流れ落ちる清冽な滝への思いを、

しばらくは滝に籠るや夏の初め

と詠んでいるからである。少くとも奥へ奥へ、未知の世界へと溯る『おくのほそ道』の旅で、芭蕉は、これから出かける奥州・北陸の旅を、「仏徒の夏籠りのような修行の旅」と考えていた[10]と、云われる通りだと思われる。『おくのほそ道』の旅は、芭蕉にとって、「身一つ」で心を清らかにからっぽにして、神仏の御手にすがり、自然と一体になって、「新しい世界を獲得する」ということ、「生まれ変わろう[12]」という、再生を期しての旅だった。

そしてそれは、出羽三山の項を見ることで、より明らかになるのではなかろうか。『おくのほそ道』の「おく」や、「深川」の「深」に関連して、日光連山の主峰・男体山が、およそ九〇〇年もの昔、奈良時代の開基だったように、そしてまた、木の花さくや姫の伝説自体が、『古事記』（上巻）や『日本書記』（巻第二）にまで溯るように、出羽三山も、推古天皇の時代から元禄二年まで一〇〇〇年もの歴史をもっている[16]。出羽三山とは、月山（標高一九八〇メートル）を中心に、北側麓近くの羽黒山（四一九メートル）、南西中腹の湯殿山（一五〇四メートル）を合わせた三山で、夫々が神の宿る修験の山だった。三山巡りの参拝者は、二〇〇〇メートル近くの月山に上る為、春から秋、特に夏に訪れることが多いようだが、『おくのほそ道』のこの項の記述も、「六月三日」から「八日」になっている。そして、

羽黒山が「現世」、月山が「死の世界」、湯殿山が「再生」を意味する

と云われるそのいわれに従ったのだろう。三日、陸奥・出羽両国の鎮守とされ、熊野に並ぶ全国有数の神とも考えられた羽黒山に登り、図司左吉（山麓の染物業者、俳号呂丸）を尋ねて、別当代会覚阿闍梨に謁し、四日は本坊で俳諧興行。五日、山頂の羽黒権現に参拝、その来歴など述べて、

八日、月山に登る。木綿注連身に引きかけ、宝冠に頭を包み、強力といふものに導かれて、雲霧山気の中に氷雪を踏んで登ること八里、更に日月行道の雲関に入るかとあやしまれ、息絶え身凍えて頂上に至れは、日没して月あらはる。笹を敷き篠を枕として、臥して明く

るを待つ。日出でて雲消ゆれば、湯殿にくだる。

と記している。底冷えの厳しい夜も過した月山での体験は、病弱な芭蕉にとって、『おくのほそ道』の旅の中でも、既に云われているように、おそらく最もつらく身にしみる体験だったに違いない。しかも『曽良旅日記』に、

浄衣・法冠・シメ斗ニテ行。

とあるように、「木綿注連」という輪袈裟を首にかけ、白木綿の「宝冠に頭を包み」、行衣の襦袢を着て、白の股引をはくという白装束の登山姿が、「精進潔斎の証」であるだけでなく、「死出の旅に向う」ことも意味するなら、そしてまた、月山神社が「御室」と呼ばれていること、更に、日の出とともに下りた湯殿山の「微細」は、『おくのほそ道』には、

行者の法式として他言することを禁ず。

とだけ記すが、湯殿山が「胎児の生まれ出る女体の神秘」を象徴し、「魂の再生の地」とされていることに注目すれば、出羽三山での芭蕉の体験は、独特な「気」の漂うファンタスティックで妙に忘れがたい不思議な所[17]と、云われる室の八島での記述とも相まって、既に伝われていることとは幾分違った意味で、芭蕉の心の奥・深層に秘められた「精神世界への挑戦」だったに違いない。

何故なら、「阿闍梨の求め」に応じて、「短冊」に認めた「三山巡礼の句々」の三句目が、次のようになっているからである。

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

と。この句はたとえば、

〈語ることを許されぬこの湯殿山での尊厳さに打たれて、私はただ感涙で袂をぬらすばかりである〉湯殿山の尊厳を讃美して挨拶の心も託する。「湯殿」に「ぬらす」は縁語。「ぬらす袂」は涙をこぼす意で、多く恋の涙に言うのを転用した[15]。

などと解釈されている。だが、果たしてこの句に、「感涙に御手付の濡れ場を匂わせた趣向」を見るべきだろうか。湯殿山に、「恋の山とする本意（御神体は湯のわき出る女陰形の巨岩）」があり、「五穀豊穣・家内安全の神として崇敬され」、社殿をもたない神社一帯が、「古くから神秘の境域とされ」て、

語るなかれ、聞くなかれ

と戒められていた[18]のであれば、この句の背後にある真意は、まさにこの句の通りで、湯殿山でその御神体に接した芭蕉が、思わずふと、だがそれだけに自然にしっかりと卒直に、というより、知る人ぞ知る（その頂点に神仏や兄半左衛門がいる）の覚悟で、強く印象に残ることや自分自身について、「事実に律義すぎるほど忠実に書いたり、赤裸々」に「描き出したりする」[19]芭蕉が、魂の解放と再生の意をこめ、心の奥に蟠るわが子誕生の秘密と、寿貞への思いを、吐露し表現した句ではなかったろうか。

五

更にこのことと関連して、尾花沢の項の、

這ひ出でよ飼屋が下の蟾の声

の句を見てみよう。この句の初案、

這出よ飼屋が下の蟇　（四季千句）

は、「蟇が鳴くのは春の交尾期だけ」だという理由で、この項の四句の最後の曽良の句の初案（後述）同様、「須賀川辺での作か」と云われている[20]。だが、『おくのほそ道』の句は、宿の主人・清風（鈴木道祐。紅花問屋で大地主でもあった豪商）への挨拶も兼ねた最初の句、

涼しさをわが宿にしてねまるなり

のまさしくその「涼しさ」（『増山井』に六月）と「ねまる」を受け、本歌の『万葉集』の、

・朝霞鹿火屋が下に鳴くかはづ声だに聞かば我恋ひめやも

・朝霞鹿火屋が下の鳴くかはづ偲ひつつありと告げむ児もがも

の「鹿火屋が下に鳴くかはづ」「鹿火屋が下の鳴くかはづ」を、「飼屋が下の蟾の声」に転じて、「俳諧の世界のもの」にした句である。季語は蟾（『増山井』に「ひきがへる」は二月）ではなく、飼屋で夏[20]。

従ってこの句は単に、

飼屋（養蚕小屋）のそんな薄暗いわびしい所で、鳴いていないで、こちらに出て来いよ、と蟇に呼びかけたもの

ではないだろう。それがたとえ、「旅泊の孤独な心が、寂しいひきがえるの鳴声」をユーモラスに「とらえた」のだとしても、そこにはやはり本歌の余韻と、初案に詠まれた春の季節の心を残して、恋情にも似た「人恋しさ」が、女人への思いを紡ぎ出し、三番目の句、

眉掃（まゆはき）を俤（おもかげ）にして紅粉（べに）の花

につながっているのではなかろうか。そして更にその「悌」に響くように、最後の句、

蚕飼する人は古代の姿かな　曽良

があるとしたら、しかもこの句の初案、

蚕する姿に残る古代かな

が、『曽良旅日記』の「俳諧書留」では、須賀川等躬亭での、

風流の初やおくの田植歌

の句を発句にする三吟（芭蕉・等躬・曽良）歌仙の前に記されているのであれば、信夫の里での、

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

の句も含め（後述）、奥へ奥へ、昔へ古代へ、そして原初へと溯る芭蕉の心、魂が、不思議にも女人への思いに、深くかかわっているように思われるのである。

「かさね」の描かれる那須野の項を見てみよう。「冬室宗幻」が芭蕉にとって、かけがえのない「風雅の誠」へのきっかけ（入口）だったように、「小さき者二人」、そのうちの一人は、「かさね」という名の童女が、みちのくへと踏み込む一歩手前の那須野の項に登場する。この項には、その「聞きなれぬ名のやさしければ」と、同行曽良の句として、

かさねとは八重撫子（やへなでしこ）の名なるべし

と記すが、この句も芭蕉の代作かと云われている。この項全体が、『おくのほそ道』のために、新たに創られたのかもしれない。というより、十四日もの長期間（『おくのほそ道』の旅の中でも最も長い）滞在した黒羽での記述は、明確な目的意識のもとに作られたのではなかろうか。

何故ならこれらの項は、既に見た、

しばらくは滝に籠るや夏の初め

の句のあとに記され、しかも「曽良書留」にある他の句はすべて除き、修験光明寺行者堂での次の句、

夏山に足駄を拝む道途かな

や、芭蕉参禅の師・仏頂和尚山居の跡を尋ねた時の、

木啄も庵は破らず夏木立

の句だけが、『おくのほそ道』の句として選ばれているからである。つまり芭蕉は、これまで「耳に」することはあっても、「いまだ」確かに「目に見」ることのなかった、「岩に書き付け」られた仏頂和尚の道歌、

堅横の五尺にたらぬ草の庵
結ぶもしくやし雨なかりせば

を胸に刻んで、役行者の「健脚」にあやかろうとその足駄を拝み、木啄さえもがこの和尚の草庵の跡だけは、そのまま大切にしておく『おくのほそ道』の旅へと、踏み出す覚悟を「新たに」しているのである。そんな記述の最初に、「かさね」の項は置かれている。それは深川を出発する時、人に譲った芭蕉庵で、

草の戸も住む替る代ぞ雛の家

と詠み、「表八句を庵の住に掛け」置いたこととも、対応するのだろうか。

というのも、そこに描かれるのは、「前途三千里」の未知の世界へと旅立つ芭蕉の身を案じて、いつまでも見送り立ち尽す弟子達と同じように、那須連山の裾野に広がる茫々たる原野で、「知る人」を尋ねて雨の夜行き惑う「乞食巡礼」のような芭蕉に、「一夜」の宿を貸す「農夫」であり、[21] 入りくんだ道を踏み迷いかねない「うひうひし」い「旅人」に、

この馬のとどまる所にて馬返したまへ

と、人を疑うことすらしない純朴な「草刈る男」の姿だからである。

野夫といへども、さすがに情しらぬにはあらず

と記されるこの土地の「やさしさ」の象徴として、都人にも劣らない「小さき者二人」、特に「八重撫子」にも等しい「かさね」という名の「小姫」（童女）が、さながらメルヘンの中の主人公のように、登場するのだろう。しかもこの「やさし」という言葉が、俳諧もその一体と云われる和歌敷島の道に、深くかかわる言葉であること、[22]そしてまた「さすがに」と記されることに注目するなら、曽良が等躬亭で聞いたかと云われる「宗祇もどし橋」の伝説[23]も、見逃す訳にはいかないだろう。『曽良旅日記』によれば、その伝説とは、「むかし」結城氏が白河を治めていた頃の話である。連歌会で「三日」も付け悩んだ句があり、歌枕の地である白河の関に来ていた宗祇が、たま〳〵その話を聞いて出かける途中、「四十斗ノ女」に出会い、問われて答えると、女は句を付け、宗祇は感嘆して、その場（小橋）から戻ってしまったという。大礒氏が同じ論文で指摘されているように、『おくのほそ道』には、同様の「昔話」が山中温泉にもあり、久米之助という「小童」の父親が俳諧を好み、若輩の安原貞室が「風雅に辱しめられて」、文化の中心で「花の都」でもある京都に戻り、貞室の門人になって、世に知られるようになったと記している。久米之助は、わずか十四歳だが、芭蕉が、『詩経』を踏まえたかと思われる「桃妖」の名（俳号）を与え、[24]菊慈童にもなぞらえて、

山中や菊は手折らぬ湯の匂

と、挨拶吟を送った程の少年（小童）であり、「宗祇もどし（橋）」の女にも、鹿嶋明神の化身とする説話のあること、[23]そして更に、芭蕉が最上川下りの舟を待つ折、

ここに古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔を慕ひ、

などと、大石田で記していることを思えば、

風流の初や奥の田植歌

の「初」も、「奥州に足を踏み入れて、風流として味わう最初のもの」の意味だけでなく、ましてや「等躬を小馬鹿にしたような」「風流の最も原始的なもの」ではなく、

風流の始源・ルーツ

として、長い時間に支えられて、「人の見つけぬ」奥にこそ、今も価値あるものとして残り続ける「初」、源初と考えるべきだろう。そして芭蕉が風雅の誠を求めて、奥へ奥へ、昔へ、原初へ、ものごとの始まりへと溯る[25]旅の途中、まるで神仏の使いのように、女や幼い者たちが登場し、それが寿貞や「冬室宗幻」に重なっているように思われるのである。

六

しかもそれだけではない。奥へ奥へ、「東のはて」へと、旅を続ける芭蕉が、仙台に入り、大淀三千風などによって、発見されたばかりの新しいささやかな名所、この紀行文の書名のヒントにもなったかと、云われる東光寺付近の「おくのほそ道」を過ぎ、たどり着いた多賀城壺碑で、次のように記していることに注目してみよう。

壺碑は、高さ六尺余、横三尺ばかりか。苔を穿ちて、文字かすかなり。四維国界の数里を記す。「この城、神亀元年、按察使鎮守府将軍大野朝臣東人の置くところなり。天平宝字六年、参議東海東山節度使同じく将軍恵美朝臣朝獦の修造なり。十二月朔日」とあり。聖武皇帝の御時に当れり。昔より詠み置ける歌枕、多く語り伝ふといへども、山崩れ川流れて道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代変じて、その跡たしかならぬことのみを、ここに至りて疑ひなき千歳の記念、いま眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦び、羈旅の労を忘れて、泪も落つるばかりなり。

と。多賀城はかっての「遠の朝廷」、西の太宰府に並び、「縄文時代から近世に至るまでの多様な遺跡や文化財」を伝えて、大伴家持や坂上田村麻呂、藤原の実方が赴任し、西行もまた訪れた所である[26]。

そこでのまるで「こがね花咲く」陸奥（道の奥）の、朽ちることのない「こがね」のような「疑ひ」も「なき千歳の記念」を、「眼前に」して、「泪も落つるばかり」のこの感動は、まさに『おくのほそ道』の旅の賜物以外の何ものでもないと、実感されたろう。だがそれも、古くから詠み伝えられ語り伝えられて、期待して訪れた歌枕などの名所・旧蹟が、「山崩れ川流れて」「時移り」、すっかり変っていたからに他ならない。例えば末の松山、

・君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ
・契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは

などと和歌に詠み継がれた末の松山について、芭蕉は次のように記している。

松のあひあひ、みな墓はらにて、翼をかはし枝をつらぬる契りの末も、つひにはかくのごときと、悲しさもまさりて、塩竈の浦に入相の鐘を聞く。

と。常緑の常磐木として知られる松林のこの変貌は、既に云われているように、人の世の無常を遥かに超えて、「天地流行」の様を、目のあたりにする思いだったに違いない。にもかかわらず、そしてまた、和歌の伝統を踏まえたにせよ、換言すれば、和歌の伝統をふまえてまで、この文章が、ことさら男女の契りに集中するのは、芭蕉個人の意志も超えた人の世の無常が、寿貞や「冬室宗幻」、さらには蟬吟への思いに重なり、「入相の鐘」の音で、心を鎮めなければならない程、芭蕉自身の心にはね返ってきたからではなかろうか。

この旅の折り返し点と云われる、平泉の項についても見てみよう。次のようになっている。

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は、一里こなにあり。秀衡が跡は、田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ、高館にのぼれば、北上川、南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館のもとにて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて、南部をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の草むらとなる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠うち敷きて、時のうつるまで泪を落しはべりぬ。

夏草や兵どもが夢の跡
卯の花に兼房みゆる白髪かな　曽良

絶唱と云われるこの文章は、「人間の営みのはかなさを強調」するとともに、「兵ども」の「夢」が、

その「夢の跡」に立つ人びとの胸に永遠に甦りつづけてゆくことに感動して

できたと云われ、「不易流行」論の根拠にもなったと考えられている。[11] だがここでも、『おくのほそ道』の旅が、「奥州に落ちのびた義経にまつわる旧蹟を訪ねる旅」だと云っていい程、義経についての記述の多い[6]のも、義経その人が、平治の乱で父・義朝を討たれ、母・堂盤に

は心ならずも捨てられた（常盤は清盛に愛されて、後に藤原長成に下げ渡され、義経は鞍馬山に預けられた）孤児であり、それが「冬室宗幻」の身の上に深くかかわるからだと、云ったら云い過ぎだろうか。医王寺に遺る「義経の笈と弁慶書写の経」（曽良旅日記五月二日の条）を、芭蕉は『おくのほそ道』執筆時に、「義経が太刀・弁慶が笈」に変えて、

笈も太刀も五月に飾れ紙幟

と記し、兄頼朝にも疎まれ自害にまで追い込まれる、その孤独で哀れな生涯の武勇を、ことさら端午の節句に托して称えているのである。平泉を目指して北へ落ちる途中、義経の若君が産湯に使ったと伝える「鳴子の湯」や、初めて尿をしたと語り伝える「尿前の関」への関心も、同じ理由からだったろう。高館で自害の後、義経は乳人の兼房に、その若君を殺させてもいるのである（義経記巻第八）。

そんな苛酷な運命の中で、短命に終った悲劇の武将・義経に、命を捧げた健げな「勇義忠孝の士」は、若君の死後、白髪を振り乱して最期の戦いに挑んだ兼房や、義経をかばって弓矢の的になり、立往生のまま死んでいった弁慶だけではない。秀衡の三男・忠衡和泉三郎についても、芭蕉は次のように記している。全文あげてみよう。五月九日、『曽良旅日記』では、「快晴」になっている。

早朝、塩竈の明神に詣づ。国守（仙台藩三代藩主伊達綱宗が、万治二年から寛文三年にかけて大造営を行う。筆者注）再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仞にかさなり、朝日朱の玉垣をかかやかす。かかる道のはて、塵土のさかひまで、神霊あらたにましますこそ、わが国の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き宝燈あり。鉄の扉の面に、「文治三年和泉三郎寄進」とあり。五百年来のおもかげ、いま目の前にうかびて、そぞろに珍し。かれは勇義忠孝の士なり。佳名、今に至りて、慕はずといふことなし。まことに、人よく道を勤め、義を守るべし。「名もまたこれに従ふ」と言へり。

と。

ここでも先ず、「かかる道のはて、塵土のさかひまで、神霊ありたにまします」「わが国の風俗」が、厳然と遺っていると記されていることに、注目しておこう。そして文治三年は、二月に義経が秀衡を頼って平泉に逃れ、十月には、義経を迎えた時既に出家していた秀衡が、死去する年である。和泉三郎が宝燈を寄進する日はわからない。あるいは秀衡が重病に陥る、九月のことだったろうか。翌文治四年二月、頼朝は早速、基成・泰衡に義経追討を命じ、翌年四月泰衡は抗し切れず、義経を衣川に殺害している。和泉三郎は父・秀衡の遺命を守り、

義経に忠義を尽して、兄・泰衡に討たれ自害した。とすればそんな不忠不孝の「泰衡らが旧蹟」を、「秀衡が跡」や三郎の「和泉が城」と対等に並べて、何の説明もなく平泉の項に記すのは、いささか腑に落ちないのではなかろうか。

だが泰衡に、蟬吟を思いもよらずふと、裏切ってしまった芭蕉自身を重ねるなら、事情は幾分違ってくるように思われる。『おくのほそ道』の旅で、七月十五日（陰暦）金沢に入った芭蕉は、義経と共に「奥へ」と下る金売吉次を襲撃して、逆に義経に「斬ら」れてしまう熊坂長範（謡曲長範）を悼み、

熊坂が其名やいつの玉祭　（曽良書留）

と詠んでいる。しかもそれだけではない。『おくのほそ道』では、妖狐の化けた玉藻の前の伝説について、二度も触れている。この狐は改めて言うまでもなく、天竺では千人の王の首をとったといわれる班足太子の塚の神、大唐では周の幽王の后・褒姒や、殷の紂王の姐妃に化けて国を滅ぼし、日本にまで渡って、鳥羽院の寵姫・玉藻の前となり、院を悩ました狐である。安倍泰成に見破られ、逃げた那須野で射殺されたにもかかわらず、その「執念」が殺生石になって、いまだに「毒気」を吐き、「蜂や蝶のたぐひ」を殺し続けていると云う。だが、実際にこの殺生石を尋ねて見た漫画家の松本零士氏は、殺生石の「中は盛んに動いている」、

一種の長い年月を時間を超えた気持ちというか、なんかそういうものがこの中で動いている（中略）何か一生懸命訴えかけているような。（中略）自分のためにも泣いてるし、この世のいろんな人の、特に不幸な目に遭った人のために涙を流してくれてる。

と云われ、

・たとえそれが九尾の狐であれ、いろいろなことでそしられようと、人の世を長い間見つめているわけだから、きっとこういう心境になっているに違いない

・芭蕉もそういう気持ちになったんじゃないのかなあ。

などと云われている。[12] とすれば、未曾有の動乱の中で、「ちょくめいにしたが」い、思いもよらず父や弟・子まで殺し、最愛の妻子とも別れ〳〵になって、挙句の果てには、重代の家臣に謀殺される義経の父、義朝の悲痛な心境を、「秋風の蕭殺の気」にだぶらせて、

義朝の心に似たり秋の風

と詠んだ芭蕉は、寿貞や「冬室宗幻」への深い秘そかな愛と、蟬吟に対する云うに云われぬ悔恨の念から、この世の是非善悪も遥かに超えて、『おくのほそ道』執筆時には既に、

天地俳諧にして万代不易に候　（元禄三年十二月末去来宛書簡）

といったこれまでにない新しい境地に、達していたのではなかろうか。

七

不易流行について、

この年（元禄二年）の冬、はじめて不易流行を説き給へり。　（去来抄）

などと云われるが、「奥州行脚」の頃から、芭蕉の「はい諧」は「すでに一変」していた（俳諧問答）ようで、羽黒山（既述）に滞在中、芭蕉は図書左吉の質問に答え、「天地固有の俳諧」「天地流行の俳諧」（閑書七日草）などと語り、『山中問答』でも、

不易の理を失はずして流行の変化にわたる。

などと述べて、〈不易流行〉の原型は既に出来ていたと指摘されている。[27]

実際に宮城野を訪れた動物生態学者の河合雅雄氏も、「不易流行」は「宮城野のなかで熟していった」と考えられている。河合氏は、

ハギというのはもともと生える芽、（中略）つまり、冬には木は枯れてしまうので、枯木を全部根元から切ってしまう。そして春になると新しい芽が生える（中略）。つまり命はずーっと続いていく。ハギという種の命は、枯れ、生え、花を咲かせ、種子を実らせ、また枯れして存続していく。それが芭蕉に不易流行という言葉を熟させる、大きなもとになったような気がすると云われ、[28]

芭蕉は、ハギという植物を特別な思いで見つめていたのではないか。

とも云われている。[12] 既に見た立松和平氏や、ねじめ正一氏・松本零士氏のお考え同様、何とすばらしい卓見だろう。

『おくのほそ道』の旅で、芭蕉が「仙台に入る」のは「あやめ葺く日」、即ち端午の節句の前日で、画工加右衛門（大淀三千風の高弟、俳諧書林北野屋、俳号和風軒加之）に逢うのは五日だから、古くから「萩」の名所として知られる歌枕・宮城野を、加右衛門と尋ねるのは、まさに端午の節句その日のことだったろう。とすれば見逃がせないことがある。『野ざらし紀行』の途中、芭蕉は「富士川のほとり」で、「哀れげに泣く」三歳程の「捨子」に出会い、次のように記しているからである。

この川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたへず。露ばかりの命待つ間と捨て置きけむ。小萩がもとの秋の風、今宵や散るらん、明日や萎れんと、袂より喰物を投げて通るに、

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

いかにぞや汝。父に悪まれたるか、母に疎まれたるか。父は汝を悪むにあらじ、母は汝を疎むにあらじ。ただこれ天にして、汝が性の拙きを泣け。

と。いささかエキセントリックで非情な文だが、それだけにこの部分の捨子・父・母を、「冬室宗幻」・芭蕉・寿貞に重ねて読むことはできないだろうか。何故なら、「捨子」を「小萩」にたとえるのは、『源氏物語』（桐壺の巻）で桐壺帝が、親に別れて住む幼い源氏の身を案じて詠む次の歌、

宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

によっているからである。『源氏物語』は、亡き母に憧れる光源氏が、藤壺の女御と密かに契り、後に冷泉帝となる子まで出来たそのことが、第二部・第三部へと続く物語の骨格になっている。藤壺の女御が、父・桐壺帝の最愛の女性であること、いうまでもない。

のみならず、『おくのほそ道』には、

一家に遊女も寝たり萩と月

の句で知られる市振の項がある。この句も遊女の記事も、『曽良旅日記』の日記の部分や「俳諧書留」にはなく、「一家に」の句は、『おくのほそ道』執筆時、即ち元禄五・六年頃の作かと云われ[10]、この項はまた、既に見た「かさね」の項と対をなし、『おくのほそ道』全編の中でも、特に幻想的で「物語的色彩の濃い一章である」。

薄幸の遊女との出会いを、親知らず子しらずという難所を越え、旅のつらさのしみじみ感じられる市振の宿に配したところに構成上のうまさが認められる。

などと云われるように[20]、「親しらず子しらず」の言葉が、「定めなき契り」に身を任す遊女を寿貞に重ね、

行方知らぬ旅路の憂さ、あまりおぼつかなう悲しくはべれば、見え隠れにも御跡を慕ひはべらん。衣の上の御情に、大慈の恵をたれて、結縁せさせたまへ

と「泪を落す」遊女を、『野ざらし紀行』の捨子同様、

不敏の事にははべれども、（中略）ただ人の行くにまかせて行くべし。神明の加護、必ず恙なかるべし

と、非情にも振り捨てて出立するこの部分を、あるいは新たに紡ぎ出したのかもしれない。

高く夜空に澄む（住む）月は、闇の夜（世）を照らして、和歌・連歌の世界では、古くからしば〳〵神仏にたとえられている[22]。そして萩（生芽＝芽子）は、『万葉集』に詠まれる一六六種もの植物の中でも、最も頻度数が高く、『古今集』以後、和歌敷島の道の象徴的存在になる第八位の桜も、遥かに及ばない[29]。のみならず『おくのほそ道』では、

小萩ちれますほの小貝小盃
ぬれて行や人もおかしき雨の萩　（曽良書留など）

行き行きて倒れ伏すとも萩の原　曽良

などと詠まれるように、萩は風流・風狂の対象であり、風雅そのものでもあった。とすれば、

一家に遊女も寝たり萩と月

と芭蕉が詠んだ時の「萩と月」は、どちらが芭蕉でどちらが遊女（寿貞）だったのか。巡り巡る季節の中で、秋にもなると、皓皓と夜空に高く輝き、地上の闇を照らす月と、地上ではかなげに寂しく、美しく咲く無力な萩と、それはどちらも、

夏炉冬扇のごとし　（許六離別詞）

とも云い、

高く悟りて俗に帰るべし

とも教えた芭蕉の俳諧の象徴のようだが、萩と月とそのどちらが芭蕉で、どちらが寿貞（あるいは冬室宗幻）だったのか。西行五〇〇年忌にあたる元禄二年[30]、奥羽行脚の旅に出た芭蕉に、「諸国一見の僧」の西行の面影を見るなら、そして西行には、追いすがる妻子を足蹴にまでして振り捨て出家したという伝説もあるが、

定めなき契、日々の業因、いかにつたなし

と嘆く遊女に、「普賢菩薩と現はれ」た江口の遊女（謡曲江口）を、重ねることもできるだろう。

八

のみならず、

父は汝を悪むにあらじ、母は汝を疎むにあらじ。ただこれ天にして、汝が性の拙きを泣け。

と「捨子」に云い捨てて、『野ざらし紀行』の旅を続けた芭蕉もまた、同じ「性の拙さ」を我が身に引き受け、「持病」の身の上に更に、雷雨に見舞われ、「蚤・蚊にせせられて眠られ」ないような、前途三千里の「はるかなる行末をかかへて」、

羈旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路に死なん、これ天の命なり

と、『おくのほそ道』の旅を続けるのである。しかもそれが、義経に忠義を尽して、あるいは不忠の結果、頼朝に滅ぼされる佐藤庄司や泰衡敗戦の古戦場、伊達の大木戸を、越す時の決意だったことを思えば、芭蕉の意図する所は、より明らかだろう。そしてその旅は、

弥生も末の七日、明ぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから富士の峯かすかに見えて、

とまたもや『源氏物語』帚木の巻をふまえて（傍点部分）、「上野・谷中の花の梢、またいつかはと心ぼそ」く、

行く春や鳥啼き魚の目は泪

と始まり、敦賀の港まで迎えに来た路通とても、大垣で「蘇生の者に会ふがごとく」、俳諧仲間との再会を喜び合ったのも束の間、

蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

と結ばれ、更に「伊勢の遷宮拝まんと」「舟に乗り」、続いてゆくのである。換言すれば、「門人三千人」と云われながら、

浮世を安く見なし、諂はず奢らざる有様也。（如水日記抄）

などと云われた芭蕉の旅は、「世上の小理」（元禄三年四月十六日洒堂宛書簡）や、「是非」（元禄三年六月二十五日乙洲宛書簡）を離れて、すべてを「只々天に」「まかせ」（同上）、

兎角拙者、浮雲無住の境界大望故、此の如く漂泊いたし候（元禄四年一月十九日正秀宛書簡）

などと記すように、決して終ることはないのである。それはまるで、義経が泰衡に攻められ自刃したその日の朝、「山寺」に出かけて「その侭帰ら」なかった常陸坊海尊（義経記巻第八）に、その過失のため死ぬことができず、何百年も生き続け、終生義経を弔う為に、あるいは義経を探し求めて、

東北の各地を回りながら民衆の苦しみを救って歩き、今日も生きつづけている

といった伝説のあるように。[31]

芭蕉が、『おくのほそ道』の「同行」に、本人の都合で行けなくなった身寄りのない乞食同然の路通[32]に代り、曽良を選んだことにも注目しておこう。曽良は長男に生まれたにもかかわらず、母方の伯母に養われ、十二歳で養父母も他界、留守僧だった伯父に引き取られ成長するが、二十六歳で実父も亡くしている。そんな孤児同様の曽良の境遇は、路通同様、わが子「冬室宗幻」の身の上にも重なったのだろうか。『おくのほそ道』の旅で、曽良の句を代作する程の親密な一体感の中にいる芭蕉は、深川芭蕉庵の近くに住む曽良と、「朝な夕なに訪ひつ訪は」れつする日々の生活の中で、まるで幼な児のように、曽良の前で「雪丸げ」に興じている。芭蕉は時には、「冬室宗幻」その人になり変ってしまうことさえあったのかもしれない。

・分別（世俗の才智にたけた者）の門に入ることを許さず。（洒落堂の記）

・知を捨て愚にあそぶべし。（山中問答）

などと述べる芭蕉の最終的にたどり着いた「かるみ」の俳諧が、

・俳諧は三尺の童にさせよ。初心の句こそたのもしけれ。（三冊子）

・蕉門のほ句は、一字不通の田夫、十歳以下の小児も時によりて好句あり。（中略）他流は其流の巧者ならざれば、其流の好句は成がたしと見えたり。（去来抄）

などと云われるように、「おもくれ」て「持ってまは」る巧みを避け（元禄三年四月十日此筋千川宛書簡）、「只かるく」「やすらかに」「埒もなく」、「不断の言葉ばかり」で「自然に」詠まれる「直なる」俳諧（元禄七年六月一日麋塒宛杉風書簡など）だったこと、そして、既に云われているように、

・先師（芭蕉）、この句を評して曰く、「伊賀の作者、あだなるところを作して、もつともなつかし」となり。（去来抄）

・ひとり伊賀の連衆このごろあだなる句の風あり、もつともなつかしき姿なり。思ふに、これ先師（芭蕉）の教へなるべし。（旅寝論）

などと云われ、その「あだ」なる風が、

「無知」（無技巧）にして「子供のすること」（ありのままで無作意）のごとくである

のなら、「冬室宗幻」を密かな心の闇の灯にして、風雅の誠を求め続けた芭蕉も、行き着く所に行き着いたのだと、云ってよいだろうか。

芭蕉が、

・松のことは松に習ひ、竹のことは竹に習ふ。ただ風雅は虚のなきこそ誠とや言はん。（智周発句集）

・松のことは松に習へ、竹のことは竹に習へと師の言葉のありしも、私意を離れよといふことなり。（三冊子）

などとと述べるのも、[33]「天道人道」は「一ツ」（元禄二年三月二十三日李晨宛書簡）だからであり、高く心を悟り、「山川・草木・人倫の本情を忘れず」、夢幻のような人の世の情に深くかかわり、「信を以て交る」（山中問答）俳諧こそが、誠の俳諧だと信じたからだろう。

元禄六年三月、猶子・桃印（三十三歳）を失い、「断腸の思ひ止みがたく」、看病の「殊の外」の「草臥」（元禄六年三月十二日公羽宛書簡など）も手助って、「虚脱状態」に陥った芭蕉は、更に元禄七年六月寿貞の死を知り、

寿貞無仕合もの、まさ・おふう同じく不仕合、とかく申し尽しがたく候。（中略）何事も何事も、夢まぼろしの世界

（元禄七年六月八日猪兵衛宛書簡）

と記し、七月故郷の盆会では更に、寿貞にたむけて、万感の思いをこめ、

数ならぬ身とな思ひそむ玉祭　（有磯海）

と詠んでいる。そしてまるでその後を追うように、同年五月、四月にできあがって間もない素龍浄書の『おくのほそ道』を携えて、古里伊賀上野に帰った芭蕉は、『おくのほそ道』の旅以後の持病の悪化の中で、

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

の病中吟を遺し、元禄七年十月大坂で客死するのである。

骸は木曽塚に送るべし

との遺言通り、芭蕉が義仲の墓の傍に眠るのも、そしてまた寿貞死後の晩年の芭蕉が、木曽塚無名庵にしば〳〵訪れ、そこを根拠に、勢力的な俳諧活動を行うのも、そこが、義仲が武士の意地を通して巴と別れ、無念の死をとげた粟津が原だったからだろうか。卯の花山（芭蕉は、義仲陣屋の跡と云われる源氏山と考えていたようだ）・倶利伽羅が谷・多太の神社・湯尾峠・燧が城など、太平洋側の義経に対するかのように、日本海側の『おくのほそ道』には、義仲ゆかりの名所・旧蹟がしば〳〵登場する。義仲は父義賢を甥の義平に殺され、義経同様二歳でみなし児になっただけでなく、朝日将軍として義経に劣らない活躍をしながら、幼い嫡子・義高を、鎌倉の人質にして死なせてもいる。「卯の花山・倶利伽羅が谷を越えて」、七月十五日（旧暦）金沢に着いた芭蕉が、芭蕉の来遊を待ち望んでいた一笑の死を知り、

塚も動けわが泣く声は秋の風

と詠んで慟哭するのも、享年三十六歳という一笑の早すぎる死が、義仲や義経の死（ともに三十一歳）に重なり、更に、芭蕉を常に待ち続けたに違いない「冬室宗幻」の幼い死に、思い及んだからではなかったろうか。父・義賢の死後養育されながら、平家方に属していた実盛を、討たねばならなかった義仲の想いを記した、多太神社の実盛の甲の項で、芭蕉は、よるべない幼い義仲を思ってか、

しをらしき小松吹く萩すすき

と詠んでもいる。

最後に『おくのほそ道』は、下郷本去来奥書に、

書は兄の慰にとて、ふるさとに残し置きぬ

と記されているように、「家兄半左衛門に贈るため」のもので、「公刊して世の声価を問うため」のものではなかったこと、即ち、極めて私的なものだったことを、既に指摘されている[34]にもかかわらず、ここにあらためて付け加えておこう。そしてまた、『おくのほそ道』の旅をおえた芭蕉が、その最終地・大垣で、一種ほっとしたさみしいような安堵感を伝える次の句、

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉

を詠み残していること[10]も。「胡蝶」が当時、「うらやまし」と云われた「心のまま」の「猫の恋」に、深くかかわること[7]を思うなら、「古き隠士」等栽と共に訪れた色の浜で、「『源氏物語』によって須磨の秋を寂しさの極致とする[15]」芭蕉が、

寂しさや須磨に勝ちたる浜の秋

と詠んでいるのも、わかりすぎる程わかるように思われるのである。『おくのほそ道』には、秋（特に秋の風）の句が何と多く見られることか。駄足ながら、越前福井俳壇[35]の古老・等栽が、『源氏物語』夕顔の巻を下敷にして登場することも、この際つけ加えておこう。「侘しげな」女と隠れ住む等栽のように、「冬室宗幻」亡きあと、芭蕉はあるいは、誰の子であろうとおまさ・おふうを伴い、寿貞と共に、世間に忘れられて隠れ住み（澄み）たいと、思うようなことがあったのかもしれない。時にはひっそりと、雛祭りなどすることも許されて。

〈註〉

（1）上野洋三『芭蕉、旅へ』（岩波新書）
（2）新潮日本古典集成『芭蕉文集』解説　芭蕉―その人と芸術―
（3）今栄蔵（角川書店）
（4）『芭蕉講座』第七巻―書簡篇―（三省堂）
（5）菊山當年男『はせを』（寶雲社）
（6）拙稿「芭蕉の中の平家物語―滅びゆくもの・移りゆくもの・かすかなものへの眼なざし―」（姫路工業大学環境人間学部研究報告第6号）
（7）松崎仁「『大経師昔暦』の再吟味」（『元禄演劇研究』東京大学出版会）
（8）高橋治氏は、「恋をうたう芭蕉」（新潮古典文学アルバム18松尾芭蕉）の中で、次のように記している。
いつであったか、伊賀上野の蓑虫庵を訪ねた時に、案内の老婦人がこんなことをいうのを聞いた覚えがある（中略）。

「芭蕉さんというのは女癖の悪かった人でしてねえ……」
真実のほどは知らない。（中略）だが、俳聖の故郷には、あるいはそんな語り伝えがあるのではないかと思えるような話しぶりだった。
などと。

(9) 芭蕉には、他見をはばかるような私事が記されていたかと、云われる切断された書簡が二通ある（元禄五年九月八日去来宛書簡・同年霜月二十七日半左衛門宛書簡）。
(10) 編新日本古典文学全集『松尾芭蕉集①全発句』（小学館）
(11) 『芭蕉の世界』（講談社学術文庫）
(12) NHK「奥の細道をゆく」取材班『奥の細道をゆく 二十一人の旅人がたどる芭蕉の足跡』（KTC中央出版）
(13) 高橋氏も、注（8）に記した「恋をうたう芭蕉」の中で、次のように言っている。
『芭蕉七部集』の文庫本を繰っておられた丸谷氏がこんなことをいわれた。
「芭蕉の恋の句はどうしてこう上手いのかな」
「そうなんだよ、女を知り尽しているって感じだね」
大岡氏の打てばひびくような返事で、両氏の芭蕉論が始った。
と。
(14) 自筆本では「あなたふと」、曽良本では「あなたふと」を、見せ消ちで「あらたうと」にしている。
(15) 新潮日本古典集成『芭蕉文集』頭注
(16) 以下『おくのほそ道を歩く』巻の十七出羽三山 羽黒山、同巻の十八出羽三山 月山・湯殿山（角川書店）、『日本歴史地名大系』（平凡社）第六巻・第九巻などにより、幾分改めたが、煩雑になるので一々注記していない。
(17) 『おくのほそ道を歩く』巻の三壬生街道 栃木・古河（角川書店）
(18) 『日本地名大辞典』6山形県（角川書店）
(19) 今栄蔵「『桃印』考―一つの夢物語―」（日本文学研究大成『芭蕉』国書刊行会）
(20) 久富哲雄『おくのほそ道 全訳注』（講談社学術文庫）
(21) 芭蕉は、同じ『おくのほそ道』の旅でも、殷賑を極める石の巻では、「宿借らんとすれど、更に宿貸す人なし」と記している。
(22) 拙稿「心と言の葉―『和歌威徳物語』を中心に―」（『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』和泉書院）
(23) 大礒義雄「芭蕉俳句『風流や』と宗祇伝説」（『芭蕉と蕉門俳人』八木書店）
(24) この俳号は、『詩経』の次の部分、
桃の夭夭（エウエウ）たる、灼灼（シャクシャク）たり其の華、之子（コノコ）于（ユキトツ）帰いで、其の室家に宜（ヨカ）らん
を踏まえているかと、云われている。「加賀山中、桃妖に名をつけ給ひて」の詞書のある次の句、

もう一つの心の世界

桃の木の其葉ちらすな秋の風　（泊船集）

には、幼くして亡き人になってしまった「冬室宗幻」への想いも、重なっているだろうか。

(25) ものごとの始まりへと溯ることで、真実を明らかにしようとすることは、文学と学文（問）がほとんど同義だった当時、その最も正当なあり方だった（拙稿「仮名草子の文学観」『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』和泉書院）

(26) 『おくのほそ道を歩く』巻の十金華山道　塩竈（角川書店）

(27) 堀信夫「不易流行―天地俳諧にして万代不易―」（白石悌三・乾裕幸『芭蕉物語』有斐閣ブックス）

(28) 尾形仂氏も注（11）の『芭蕉の世界』で、「平泉」の項について、

「夏草」の恒常性を、年々、季節の移り変わりに伴って、生えては枯れ、枯れては生える、その変化流転の姿の中に見出すとともに、はかなく消え去った「兵ども（つわもの）が夢」が、その「夢の跡」に立つ人びとの胸に永遠に甦りつづけてゆくことに感動しているのです。流転の相自体を恒久と観ずると同時に、流転の相の中で永遠に生きつづけてゆくものへの感動を寄せている点では、「五月雨の」の句も変わりありません。（傍点筆者）

と云われ、それは「壺碑」の項にも、冒頭部分にも照応するものだと、云われている。

(29) 中尾佐助『花と木の文化史』（岩波新書）

(30) 白石悌三「もう一つの『細道』」（『芭蕉』花神社）など。

(31) 相澤史郎『奥州・秀衡古道を歩く』（光文社新書）。時空を超えて生き続ける海尊については、『西鶴諸国ばなし』（一の六）や、『和漢三才図会』（六十五）にも見ることができる。また『おくのほそ道』には、最上川―船くだりの項に、常陸坊海尊を祀る「仙人堂」の語がある。

(32) 芭蕉が、身寄りのない乞食同然の路通を愛し、信頼して、隣庵に住まわせ、共に『おくのほそ道』の旅に出ることを楽しみにしていたこと、注（6）の拙稿で述べた。

(33) 但し、『智周発句集』は富山奏「伊賀の蕉風―あだなる処を作して、尤もなつかし―」（白石悌三・乾裕幸『芭蕉物語』有斐閣ブックス）によっている。

(34) 穎原退蔵・尾形仂『新訂おくのほそ道―付現代語訳曽良随行日記―』（角川文庫）解説

(35) 紫式部は、越前国府の置かれていた武生に、越前守に任ぜられた父・為時と共に、一年程過ごしている。為時は藤原冬嗣の六男・良門の四世の孫、母も冬嗣の長男・長良の五世の孫だが、道長に至る摂関家の主流にとり残され、為時の代には更に零落していた（『日本古典文学大辞典』など）。

〈附記〉

本稿は、大手前大学人文科学部日本文化学科日本文学特殊講義での授業が、きっかけになって出来たものです。受講生の皆さんにはお礼申します。ありがとう。また本稿を、車椅子の毎日を送っている母に捧げる。母がそばにいてくれなければ、多分できなかったろう。